

マレーシアから見る多文化共生の在り方

代表研究者：白石 遥

共同研究者：大松 千紘・白畑 正江・竹中 文都・多田 悠季

〈目 次〉

はじめに

第1章 マレーシアについて

第2章 マレーシアの人づきあい

第3章 多民族国家マレーシアにおける言語表記

第4章 忌避食材の取り扱い

第5章 異宗教間の結婚からみる多民族国家 マレーシア

第6章 受け入れる側の意識

おわりに

はじめに

私たちはゼミの時間にマレーシア映画「タレントタイム」を見ることになり、映画を見る前の事前学習の一環として、いくつかマレーシアに関する資料を読むことにした。そのとき、マレーシアがどういう国なのか、マレーシアがどのように多文化共生を実現させているのかなどを知った。私たちが見た映画「タレントタイム」とは、様々な人が混在する世界をそのまま肯定し、民族や宗教の壁を軽やかに超える世界観を描くヤスミン監督が作った映画で、多民族国家という背景を持つマレーシアでの人間模様が描かれている。「自分とは異なる民族が近くに住むということ」それを当たり前に取り入れるのは容易ではないことを、私たちは資料と映画を通じて感じた。

近年では、グローバル化はますます私たちの生活にまで浸透し、単一民族国家の日本に住む私たちにも多民族共生というのは無縁の話ではなくなってきた。言語も、文化も、宗教も違う人々が近所に住む恐怖や不安感も誰もが感じる可能性のあるものになりつつある。そんな現代だからこそ、私たちは自分の目で多文化共生の姿を見て、自分の耳で現地の人々の声を聴き、マレーシアから多文化共生の在り方を学びたいということになり、今回の調査が決まった。現地調査をするにあたって、各々が特に注目して調査したいテーマを決めて現地へ向かった。

本調査の目的は以下の3点である。①多民族国家における多文化共生社会について理解を深める。②共生についての理解を深めたうえで、現在の日本は共生という点でどのような国なのかについて考えを深める。③研究に参加する個々のメンバーが自身の所属するコミュニティとは異なる環境で調査する方法を、より実践的に学び、一つの経験とする。

本調査では、①各々のテーマに関連した文献調査②クアラルンプール市内およびペナン、マラッカにおける観察③ホームステイ先での現地の人への聞き取り、以上の3つの方法から調査を実施した。

第1章 マレーシアについて

マレーシアは東南アジアに存在する国土面積33万338平方キロメートルの国である。国土はマレーシア中心部であるマレー半島、ボルネオ島の一部、サバ州、サラワク州から成り立っている。面積は日本の9割弱という広大さながら、人口は日本の16%にあたる約3000万人となっている。国土面積の60%が熱帯雨林に覆われているのが特徴である。また、マレーシアはマレー系・中華系・インド系が住む多民族国家であり、それぞれの民族が異なった宗教、生活習慣を持つことから、それらが融合した独特な文化を生み出しているのも特徴である。

民族の割合はマレー系が67%、中華系が25%、インド系が7%となっている。また宗教はイスラム教が61%、仏教が20%、ヒンドゥー教が6%、儒教・神道が1%となっている。民族が分かれている分、言語も異なっており、マレー語や中国語、タミール語、英語などが主要言語として使われている(外務省)。

第2章 マレーシアの人づきあい

マレーシアは多民族国家で多文化共生社会と聞く。マレーシアの人々はお互いの民族文化と宗教を尊重して共生しているとの事である。翻って私たち日本人は単一民族でありながら人との交わりが希薄になり不信感を持つなど誤解することが出てきた。さらに近年グローバル化が進み訪日客や外国人労働者の在住を目にすることが少なくない状況にある。その様な中マレーシアの人達は他者とのコミュニケーションについて、どのようにして共生しているのか検証したく、フィールドワークを行った。

この章ではフィールドワークを通してマレーシアの日常やマレーシアに居住する人から気持ちや考えを聞き多文化共生について考察する。また調査の方法はマレーシアのクアラルンプールで一泊する、その後バングリリス村にてホームステイをしながら、出会った人に話を聞く。

マレーシア初日クアラルンプール空港からタクシーにてホテルへ着くまでに行き交う人それぞれが肌の色、顔立ちの違いにここが多民族国家であることを感じる。夜はホテル近くの屋台で食事をしたが都心でもありまさに民族融合を感じさせる賑わいであった。翌日バングリリス村への送迎車に乗ると日本語が話せるガイドさんは中華系の人で運転手はマレー系であった。ホームステイ先はマレー系でこの村の村長さん宅である。私たちの世話をしてくれた村長さんの奥さんはお料理上手でおおらかな人であった。隣には村長さんの娘さん宅があり訪れた時日本でも馴染みの中華菓子をご馳走になった。

私はホームステイ先の奥さんやガイドさん、運転手さんにお話を伺った。質問の内容は①異民族の印象はどうか。また異民族との付き合いはあるか。②異民族と親しくするには何が秘訣か。③民族や宗教を超えて触れ合う機会はあるのか。というものである。回答は①一つの民族一つのマレーシア。職場には異民族の人も多く、お互いの新年には招待しあっているが食事は食べられる物と食べられない物がある。異民族の人の悩みの相談に応じた。②秘訣はない。お互いの宗教と文化を尊重する事。③触れ合う機会があり、お互いの新年に招待することや民族や宗教を超えて触れ合うにはお互いの文化をお互いに理解することである。との回答を頂く。①の回答の「一つの民族一つのマレーシア」とはマレーシアの独立記念日に発表された民族融合を目指したスローガンであり、それを述べられた。

ホームステイは2泊3日で聞き取りは3人のみであったがそこからは、マレーシアに多文化共生は存在したことが分かった。マレーシアは植民地時代からの移住者などで民族構成が多様なのはこの国の宿命である。ホテルや空港その他の職場でも異民族同士、同じ職場で仕事をしていることが通常となっている。職場が同じならば親しくなることもあり異民族異宗教間でも交流がされていた。これには共通の言語が功をなしている。お互いの新年を祝う、あるいは中華菓子をマレーの人も食する、異民族であっても人の心に寄り添うなど地域的に住み分けはあるが気持ちや文化の交流は存在した。

この交流は土台に相手を尊重する気持ちがなければ存在しえない。宗教が違えば文化も違い不可解な疑念を持つものだが、マレーシアではお互いの文化を尊重することを推奨していてまさに実践されていた。回答された一人ひとりがお互いの文化や宗教を理解し尊重することを意識していて、そのことは意外に思えたが尊重することを意識するという姿勢が民族の融合を保っていると思われる。この相手を尊重する姿勢は多民族のみならず単一民族である日本人の私たちにも共通するコミュニケーションの第一歩であると考えられる。

第3章 多民族国家マレーシアにおける言語表記

この章ではマレーシアでの現地調査からわかったマレーシアにおける言語の使われ方についてまとめる。多民族国家であるマレーシアでは、それぞれの民族がそれぞれの言語を使っている。マレー系の民族はマレー語、中華系は華語、インド系はタミル語という調子である。公用語はマレー語のみであり、英語は準公用語となっている。しかし、いくつかの民族が集まるときの共通語は英語であり、マレー系・中華系・インド系いずれの人も学校で英語を勉強する。また、高校での教育言語はマレー語のみとなるため中華系・インド系の人にはマレー語も勉強しなければならない。

今回の調査で訪れたのは、首都クアラルンプールと、世界遺産の街ジョージタウンとマラッカ、そしてバンダリムラヤの4つの地域である。主に調べたことは道路などの標識はどの言語で書かれているのかということと商店ではどの言語が使われているのかの2点である。

空港ではたくさんの言語が同時に併記されていた。1番大きく書かれているのは公用語であるマレー語であり、次いで英語が書かれていた。華語・タミル語は日本語と同じ大きさで書かれていた。こうした看板には同時にイラストが描かれ、文字がわからない人でも内容がわかるように工夫がされていた。駅の看板などは空港ほどたくさんの言語は書かれておらず、マレー語と英語の2種類が書かれているところがほとんどだった。券売機は言語選択のボタンでマレー語・英語・華語・タミル語の4種類が選べるようになっていた。

道路上の行き先をしめす標識はマレー語だけで書かれていたが、サービスエリアや空港などイラストが添えられているものもあり、分かりやすくなっていた。通りの名前や町名を示す看板はマレー語と他の言語1つで書かれていた。クアラルンプールではマレー語の下に英語が書かれているものばかりで、すべての民族が分かる英語に統一しているようだった。ジョージタウンやマラッカでは英語、華語、タミル語のいずれかがマレー語の下に書かれていた。インド人がかたまっている生活しているエリアではタミル語が書かれるなど場所の特性によって言語が選択されているようだった。

こうして道路標識や看板では限られた言語が書かれている中、商店の看板などではよりたくさんの言語が書かれていた。都市部のお店ではマレー語・英語・華語・タミル語がす

べて書かれた看板をたくさん見かけた。少し都市部から離れた場所ではタミル語以外の3言語が書かれていた。商店は客商売であるため、自分と違う民族の人にも来てもらい売り上げを上げたいと考えているのだろう。そのエリアに住んでいる人の母語をすべて書くという傾向が見られ、自分と同じ民族の人だけを対象にする、自分と同じ民族が経営する店に行くというのではなく共存して生きている様子が看板から読み取れた。

今回、道路標識と商店の看板を調査して、道路標識より商店の看板が多くの言語を使用しているところに面白さを感じた。多民族共生を行政が整えるのではなく、住民自身が共存に必要なことを実践しているのである。それぞれの民族の母語を守りつつ、生活空間を分けるのではなく共存している。これこそがマレーシアが多民族国家であると言われる所以だと感じた。

第4章 忌避食材の取り扱い

本章ではマレーシアにおける忌避食材の扱い方についての調査報告を行う。マレーシアは多民族国家であるがゆえに、信仰する宗教も多様である。国民の6割に当たる人々がイスラム教、1割の人々がキリスト教、1割の人々がヒンドゥー教、その他の人々が仏教・儒教などを信仰している。宗教にはそれぞれ忌避食材が存在するため、それらの宗教を信仰する人々の食性に大きな影響を与えている。

イスラム教では忌避されていない食べ物を「ハラール」、されている食べ物を「ハラーム」と呼ぶ。イスラム教におけるハラームの代表格は豚肉である。豚肉そのものは勿論のこと、豚肉と同じ冷蔵庫に入れたもの、同じ調理器具で調理したものなども豚肉同様忌避される。豚肉以外の肉は忌避食材として扱われていない。キリスト教では「神の作ったものは全て良いもの」という考えがあるため食のタブーが存在しない。ヒンドゥー教では肉類全般が忌避食材となっている。特に神の乗り物である牛を食すことは厳格に忌避される。仏教では戒律で殺傷を禁じているため肉を食することは少ない。しかし、あくまでも殺傷が禁じられているだけなので、自分の手で殺したものでなければ食しても問題ないとされている。イスラム教、ヒンドゥー教、仏教ではアルコールも忌避されている。このように宗教によって忌避される食材は様々であるが、現地でこれらの食材はどのように扱われているのだろうか。

マレーシアには現地資本のスーパーマーケットと並んで外資系企業の食品販売店も存在している。これらの外資系商品販売店では忌避食材も気にせず取り扱われていることも多い。例えばマレーシアにあるイオン系列のスーパーマーケットではしゃぶしゃぶが日本と同じように販売されている。一方で現地資本のスーパーマーケットでは豚肉は一切取り扱われていない。イスラム教では豚肉と同じ冷蔵庫に入った食品も忌避されるという理由から取り扱い自体がされていないのである。牛肉は僅かながら取り扱われており、鶏肉は様々な形のものも多く扱われていることから鶏肉の需要の高さが伺えた。また、羊肉や馬肉、山羊肉など日本ではあまりなじみのないものが牛肉と同等規模で取り扱われていた。

また、アルコール類もマレーシアではキリスト教徒と外国人しか飲むことが出来ないため、大々的には取り扱われていない。ただし観光地、リゾート地では小スペースながらアルコール類が販売されていた。観光地やリゾート地では外国人からの需要を満たすために販売されているのだと思われる。

以上のようにマレーシア中心部では、現地資本企業の食品販売店が多いこともあり宗教に配慮した品揃えがされているが、郊外へ行けば外資系企業の食品販売店が増える分、宗教的配慮も薄くなるようである。またマレーシアは観光立国であり、ペナンやマラッカのような一大観光地やリゾート地では外国人観光客が多数訪れている。そのような観光客からの需要を満たすため、観光地ではアルコール類を取り扱うなど、観光立国としてのマレーシアと多民族国家としてのマレーシアの折衷点を模索しているように感じた。

第5章 異宗教間の結婚からみる多民族国家 マレーシア

この章では、異宗教間の結婚に関するマレーシアでのルールやそれに対してのインタビューを通して、多民族国家マレーシアの現状について考える。多宗教国家であるマレーシアでは、特に国教であるイスラム教を信仰しているかその他の宗教を信仰しているかで区分される。例えば、マレーシア人の婚姻と離婚、財産相続などを規定する法律があるが、これにはムスリムにはその適用が除外される旨が明記されている。その代わりに、ムスリムは各州が定めた条例に従うことになる。この法律ではムスリムを当事者とする婚姻は登録できないため、ムスリムと非ムスリム間で婚姻がなされるときには、通常非ムスリムの側が改宗せざるを得ない。

婚姻に関してこのような宗教的ルールを持つマレーシアにおいて、人々は異宗教間での結婚についてどう考えているのか。4人のマレーシア人にインタビューを行った。

まず、神戸にあるモスクでマレーシア人男性へインタビュー調査を行った。彼は、ムスリムはムスリムとしか結婚できないというルールのもと、結婚する際に日本人である妻はムスリムとなった。妻は日本人でムスリムになるということに抵抗はなかったのかという私の疑問に対して、彼は「愛があれば大丈夫」と答えてくれた。アッラーの教えを理解し、それに従いさえすればムスリムになることができるため、難しいことはないと話していた。

次に、マレーシア人留学生へインタビュー調査を行った。彼女の両親は結婚する際、父は仏教を、母はキリスト教を信仰していた。夫婦が異なる宗教を信仰する場合には、結婚する際に子どもの宗教などについて話し合われることが多いというが、彼女の両親の場合は母親に比べ父親の信仰心が強くなかったため、子どもたちは皆母親とともにキリスト教を信仰している。また、キリスト教徒である彼女がムスリムと結婚するには、改宗し彼女自身がムスリムになる必要があるため、ムスリムとの結婚には慎重にならなければならぬと話していた。

さらに、ホームステイ先のバンギリス村でホストファザーへインタビュー調査を行った。彼は、もし非ムスリムがムスリムと結婚したいと考えるのであればその人自身もムスリムになり、家族の理解を得られれば結婚できると話していた。しかし、改宗に関して家族の理解を得ることは非常に難しいことであるとも語っていた。だが、結婚するには非ムスリムがムスリムになるしか方法がないため、単純であるが難しい「改宗」を行わなければならないのだ。

最後に、現地でガイドの方へインタビューを行った。彼は中華系マレーシア人であるが、周りで非ムスリム同士の異なる宗教間の結婚は例があっても、ムスリムと非ムスリムが結婚した例は一つもないということだった。また、彼自身ムスリム女性と親しくなることもあるが、絶対に結婚などは考えないということだ。もし彼自身がムスリム女性との結婚を

希望したとしても、家族からの猛反対があることが明らかだからである。

以上のインタビュー調査を通して、異宗教間の結婚に対してのムスリムと非ムスリムの考え方には大きな溝があるのではないかと感じた。結婚に関しては両者の間に考え方の違いが存在するものの、「ムスリムとの結婚は最初から考えない」というように割り切っている人も多いのであれば、一定の距離感のもと、共生が実現しているのではないかと考える。

第6章 受け入れる側の意識

この章では、マレーシア研修で感じたマレーシアの町や人々の様子から、日本の現状と比較したうえで、多文化共生社会で生活する受け入れる側の意識について考える。

まず、日本の現状から述べる。2011年3月に起きた東日本大震災での被災者の中には外国人も多く存在していた。被災地の中でも最も多く外国人が避難したとされる三条中学校。近くには東北大学国際交流会館の宿舎があり、留学生や外国人研究者とその家族が暮らしていた。そのときのことを踏まえて、三条中学校区内の町内会長は「外国人住民との日ごろの付き合いが大切だと実感した。(中略)外国人住民に対して『付き合いにくい』『わからない』といった近づきたいイメージがあるように思う」と述べていた。この事例からもわかるように、日本人の私たちであっても、いつ外国人との共生を余儀なくされるかわからない。

次に、マレーシアでは、1日目に着いたクアラルンプール駅は何人なのか見当がつかないほど多くの民族であふれかえていた。駅や町では、民族の違い関係なく共存しながら仕事をしていた。ホームステイ先のバングリス村の中も民族ごとに集まって暮らしているため、居住区の様なもの自然的に出来上がってはいるが、それを人工的に柵で区別している様子はみられなかった。さらに、事前にマレーシア留学中の友人から聞いた話によると、彼女はマレーシアの過ごしやすさの理由として「白人主義がなく、多民族国家なので外国人としての扱いをされないのが一番の理由だ」と言っていた。ここでいう外国人扱いというのは、外国人だと言ってじろじろ見ることはないということだ。

このように、マレーシアの場合は、「他の民族を特別視しない」ことで、自分と異なる民族の人との共生という場において、自分の民族を意識せずに皆が同じ一人の人間として生活することが可能となり、「過ごしやすさ」というものを生み出しているといえる。これとは反対に、日本の場合は「外国人」ということにばかり目を向けてしまっている。しかし、そのような日本であっても各地で多文化共生が求められるようになっていくだろう。そのとき、私たち一人一人が近くで暮らす外国人を「わからない」と突き放すのではなく、一人の住民として迎え入れ「わかりたい」と歩み寄ること。「民族」という概念を忘れ、一人の人間として向き合うこと。これらこそが多文化共生社会で生きる住民として欠かせない意識なのではないかと考える。

おわりに

以上、この報告ではマレーシアでの現地調査をもとに、多民族国家マレーシアにおける多文化共生について様々な観点から考察を行ってきた。人付き合い、言語、食、結婚、そして受け入れる側の意識という点から考えを深めてきたが、私たちがそれらから感じとったことは多様であった。また私たちの考察も多岐にわたったが、以下のことは私たちの中に共通して生まれた考えである。

まず、多民族国家マレーシアにおいて、異なる民族・異なる文化・異なる宗教が混在していることは、彼らにとって当たり前の日常なのであるということだ。マレーシアという国がこのように形成されていることは、彼らのずっと前の世代からのことである。自分と異なるバックグラウンドを持つ人々と共に生きる親の姿を見ながら、自分も同じようにそれを行う。そしてそれが子の世代へと受け継がれていく。このようにして多民族国家マレーシアは歴史を築いてきた。次に、これを実現してこられたことには、彼らの間に「絶妙な距離感」があったのではないだろうか考える。長い年月をかけて彼らが見つけ出した距離感である。人付き合いの点では相手への理解を深めて歩み寄りつつ、結婚のような親密な関係においては一線を画す。さらに、言語や食では互いの文化を保持しつつ、それぞれ関わりあって生きている。このようにして彼らの文化は互いに独立し、尊重され続けてきたのだろう。

一方、日本で暮らす私たちは、文化的に同じバックグラウンドを持つ人と共に生活することが多い。しかし、近年は海外からの労働者の受け入れが積極的になされるなど、日本国内でも外国人と共に生きることが珍しいことではなくなってきている。だが、外国人が日本人と馴染めず孤立している例があるのもまた事実である。そこで、上で述べたようなマレーシアの人々が持つ考えには、私たちも大いに見習うべき点があるのではないだろうか考える。相手の個性への理解を深め歩み寄りつつ、相手の個性を独立させる距離感である。グローバル化していく日本社会において、このような価値観は私たちの土台となっていくのではないだろうか。

【参考文献リスト】

- ・伊藤芳郎、朝間康子(2015)「外国人避難者と災害時多文化共生」『教育復興支援センター紀要』第3巻, pp.87-97
- ・外務省「マレーシア基礎データ」<http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/malaysia/index.html> (2017年11月16日)
- ・齋藤光代(2005)「マレーシアにおける言語政策についての考察」『融合文化研究』第5号 pp.204-219
- ・多和田裕司(2003)「マレーシアにおける多宗教共存の現状—法的、制度的側面を中心に—」『大阪市立大学大学院文学研究科紀要』第54巻 第8分冊, pp.27-41